

<p>6日 (日)</p> <p>申命記 19章</p>	<p>「わたしが…この戒めをすべて忠実に守って、あなたの神、主を愛し、生涯その道に従って歩むならば、あなたの神、主は…先祖に与えると約束された土地をことごとくあなたに与えられる」(8-9節)。主は、故意に人の命を奪う者には、憤られるが、過失によって罪を犯した者にも、主の民として生きる道として、「逃れの町」を必ず備えてくださる。</p>
<p>7日 (月)</p> <p>申命記 20章</p>	<p>「あなたをエジプトから導き上られた神が共におられるからである」(1節)。戦争についても聖書は語る。神の厳しい言葉をどのように聞けばよいのか、と問いかけられる。大きな課題に向かう戦いの前に、主は恐れるなど語る。エジプトからの脱出を守ってくださる方が、今私たちの前に立ち、そして後ろから支え、私たちの命を導いてくださる恵みに集中して。</p>
<p>8日 (火)</p> <p>申命記 21章</p>	<p>「あなたは主が正しいとみなされることを行うなら、罪なき者の血を流した罪を取り除くことができる」(9節)。申命記21章は、十字架にかけられるイエス・キリストの物語を思い起こされる。イエス・キリストは、「この流血事件と関わりがない」と見捨てられ、殺されていった。その命を主なる神は、正しいとみなして下さり、私たちの救いとして据えてくださる。</p>
<p>9日 (水)</p> <p>申命記 22章</p>	<p>「ぶどう畑にそれと別の種をまいてはならない」(9節)。同胞(仲間)の持ち物も一緒に守る礼拝共同体。その共同体には誰が招かれていたのだろうか。異なる種を合わせてはいけないと聖書が語るが、それは異なる物を排除するのではなくて、それぞれが神さまに託された働きを認め合い一緒に生きることへの招きの言葉ではないだろうか。</p>

<p>10日 (木)</p> <p>申命記 23章</p>	<p>「主人のもとを逃れてあなたのもとに来た奴隷を、その主人に引き渡してはならない」(16節)。主の会衆に加わることのできない人たちがいるが、奴隷の命を守る責任を主はイスラエルの民に託される。主の会衆(礼拝)には入れなくても、一緒に生きる民がいること、守るべき命があることを主は示してくれる。私たちが守るべき命の責任の枠はどこまでだろうか。</p>
<p>11日 (金)</p> <p>申命記 24章</p>	<p>「あなたは、エジプトの国の奴隷であったことを思い起こさない。わたしはそれゆえ、あなたにこのことを行うように命じるのである」(22節)。これまでの神からの律法は神の民として、奴隷から解放された恵みを覚えて生きるためのもの。エジプトでの痛みの経験は、寡婦や寄留者、孤児の痛みに共感することができる大切な経験として、主は用いてくださる。</p>
<p>12日 (土)</p> <p>申命記 25章</p>	<p>「あなたの家に大小二つの升を置いてはならない」(14節)。イスラエルの民は、主の律法に従って生きている。その律法は、私の都合で理解するのではなく、神の測り(升)できちんと理解し、そのように生きるとするならば、神は命を与えると約束している。私たちは、神様以外の価値観を優先させるとき、それはだれの基準に合わせているのだろうか。</p>
<p>13日 (日)</p> <p>申命記 26章</p>	<p>「(主は)乳と蜜の流れるこの土地を与えられました。わたしは、主が与えられた地の実りの初物を、今、ここに持って参りました」(9-10節)。この言葉に、イスラエルの人々の「初心」が示されている。エジプトで苦しみ嘆く彼らの声を聴いて、荒れ野の旅を守り導いてくださった神への心からの感謝。今日、わたしは何を携えて主の日の礼拝をささげるのか。</p>